# ※必ず7枚以内でまとめてください

# 公益財団法人あいちコミュニティ財団

**あいち・なごや子どもとつくる基金**

**2014年度 助成事業申請書**

公益財団法人あいちコミュニティ財団　御中

申請日：　　平成27年　　１月　　22日

**１．申請団体について**

（１）基本情報（※のみ【公開】／【公開】は「あいち・なごや子どもとつくる基金」寄付者や最終（公開プレゼンテーション）選考の参加者に公開します。）

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 事業名（※） | 地域と協働した発達障がい児の家族支援を考える  ～精神的ケアとソーシャルサポートを目的としたサロンの創設～ | | | | | |
| 申請金額（※） | 10万円 | | | | | |
| （ふりがな）  団体名（※） | とくていひえいりかつどうほうじん　パカパカ  特定非営利活動法人　Paka Paka | | | | | |
|
| （ふりがな）  代表者氏名（※）  （役職） | どひ　かつや  土肥　克也  （　　　　　理事長　　　　　） | | | | | （印） |
| 団体所在地（※） | 〒470-2385  愛知県知多郡武豊町北中根１丁目13-１ | | | TEL：0569-77-0492 | | |
| FAX：0569-77-0492 | | |
| E-mail：office@paka-paka.net | | |
| （ふりがな）  担当者氏名  （役職） | どひ　りさ  土肥　りさ  （　事務局長　） | | | TEL：0569-77-0492 | | |
| E-mail：office@paka-paka.net | | |
| 「あいち・なごや子どもとつくる基金」  への寄付 | | 有　　・　　無 | | | | |
| 寄付者名 | 特定非営利活動法人PakaPaka | | | |
| 「募集説明会」「個別相談会」への参加 | | 募集説明会　・　個別相談会（○を付けてください） | | | | |
| 認定ファンドレイザー認定者  （○を付けてください） | | 准認定ファンドレイザー　　有　　・　　無 | | | | |
| 氏名： | | | 役職： | |
| 認定ファンドレイザー　　　有　　・　　無 | | | | |
| 氏名： | | | 役職： | |
| CANPANでの情報開示レベル★5つ取得 | | 済　　　・　　　未　　　（○を付けてください） | | | | |

## （２）地域や社会のビジョン（3～5年後のあるべき姿）と、申請団体が果たす役割

|  |  |
| --- | --- |
| 地域や社会のビジョン  （3～5年後のあるべき姿） | 知多半島は5市5町で構成されている。その中で、北部の地域は名古屋市に隣接しており、障がい児の療育方法や制度についての情報も得やすい。一方、南部の地域は人口も少なく、療育施設もここ2年でやっと開設されるといった状況であり、療育に対する当事者の意識も低いのが現状である。実際に、母子通園施設に通うということを家族や周囲の人に理解してもらえずに決断さえできないといった事例も多く聞かれる。  子育ての考え方も、世代間によって大きく違ってきている昨今、発達障がい児の療育支援とソーシャルサポート体制も、都市部と郊外では大きな差がみられる。地域により、当事者が抱える不安や悩みはさまざまではあるが、子どもの障がいや将来への不安や、サポートの少なさであることは共通している。  発達障がい児の療育技術や研究が進歩している現代において、発達障がい児の療育環境の質の向上のための家族支援の充実を目指すためにも、療育を受けている障がい児を抱える家族を支える場所づくりの必要性を、障がい児支援に関わる専門機関が認識し、家族の支援力の向上とメンタルケア、ソーシャルサポートを目的とした場所づくりが行われることが望まれる。また、こういった場が、知多半島の各地域で定期的に開催されていくことが、発達障がい児の療育環境の質を向上させるとともに、各地域での発達障がい児支援の啓発につながっていくことが望まれる。 |
| 申請団体が果たす役割 | 当団体は療育の専門家や発達障がいを持つ子どもの母親が役員・スタッフとして在籍しており、親同士のネットワークも構築されている。また、理事長、事務局長は発達障がい児を抱える親でもある。現在も定期的に発達障がい児とその家族同士の交流の場を設けているが、他の事業所が行う交流の場より、参加人数が多い。それは、交流の場や学習会を企画・運営しているスタッフが同じ経験をした親でもあるという点にある。発達障がい児の発達段階に合わせた支援において、家族のメンタル面や障がいに対する理解状況に合わせて進めていくことは必要なことであるが、家族が療育以外の事について悩みや困っていることを支援者に発信してくることはとても少ない。その分、この交流の場では、親のリフレッシュを目的として開催する中で、発達障がい児の家族背景とそこにある課題を知ることのできる大事な場所となっている。当団体がこれまで2年間で開催してきた座談会には、月2回の開催にて平均３人の参加があり、そのなかから、相談支援と連携し、サポートにあたる件数は５件あった。主な相談事例としては、発達障がい児のお子さんがいる家庭での第2子・第3子出産時のサービス利用など、ソーシャルサポートの場をもたなかった場合、「大変で当たり前」という家族がもつ固定観念や我慢により、そのまま過ぎて行ってしまうであろう事例が多い。発達障がい児の療育と並行し、潜在する家族が抱える問題を見出し、ソーシャルサポートに繋げることが当団体の大きな役割となっている。また、その活動を地域と協働し発信していくことで、地域での発達障がい児支援の発展につなげていきたいと考えている。 |

## （３）団体の強みと弱み、外部環境の機会と脅威（各項目3つまで）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 内部 | 【強み】  ・理事長・事務局長は、発達障がい児を抱える親である。  ・理事長は、武豊町手をつなぐ育成会副会長,  知多南部自立支援協議会子ども部会会長。  ・団体として、武豊町子育て支援ネットワーク  に参加しており、他団体の特別支援学級の親のサークルにも、アドバイザーとして事務局長が参加している。 | 【弱み】  ・団体が発足し2年であり、組織の基盤づくりがまだ浅い部分がある。  ・NPOにおける地域に根差した活動という部分で、経験が浅いスタッフが多い。 |
| 外部 | 【機会】（社会、世間の傾向や追い風）  ・知多南部の障害児支援事業所でも、いくつか家族対象のサロンを実施した事業所があったが、自主事業では運営が難しい、または参加者が少ないといった状況で継続の見通しが持てていない。  ・知多南部放課後デイ連絡協議会にて、家族対象のサロンが必要であるとの意見が出ており、知多南部自立支援協議会子ども部会でも今後話合いが進められる予定である。 | 【脅威】（社会の脅威、向かい風）  ・ABAを根拠とした個別療育についての理解は都市部では浸透してきているが、実践する機関が少ない故に、郊外では理解が得られないことが多くある。(愛知県で公的サービスにてABAによる個別療育を提供している団体は当団体を含め2団体のみ)  ※ＡＢＡ(応用行動分析)とは、いい行動のあとにはご褒美(大好きなこと)を、悪い行動のあとには何も与えないといったような一連の指導をすることにより、発達しょうがいのある子に、コミュニケーション・社会性・作業等のスキルを、今のお子さんにあった方法でにつけてもらうオーダーメイドの療育です。 |

## （４）これまでの主な事業と成果（補助・助成事業の場合は、補助・助成元と金額も記入してください）

※概要を箇条書きで記入してください。

・　ABAに基づいた個別療育(公的サービスを受ける)　現在会員数44名。待機待ち7名。

* 発達障がい児の親対象の学習会　言語発達、身辺自立などをテーマに、家庭での支援のコツを学んだ。

延べ参加人数　約180名

* 発達障がい児の親対象のペアレントトレーニング

自宅での家庭内療育の方法を学習。ABA(応用行動分析)をベースに、ほめ方、叱り方の子育てのコツを伝える。子どもの現状を理解し、今家庭でできる取り組みを考え、目標を立て実践するという流れの連続講座。少人数で、それぞれの取り組みを親同士がシェアをしながら進めていき、親同士の交流の場にもつながった。述べ参加人数　15人

* 発達障がい児の母親対象座談会　平成2012年10月～月2回ペースにて開催。

リフレッシュをテーマにするだけではなく、兄弟児について、外出、サポートブック作成についてなどをテーマに行っている。顔を合わせる機会が多くなることで、第2子、第3子出産時の相談について2件、療育施設から保育園への移行について2件、学校との関わりについて1件、相談支援センターと連携し、サポートにあたっている。　述べ参加者数　約80人

* 発達障がい児とその家族対象のパン教室・・平成２４年度から年3回、継続して開催している。

平均12組に参加があり、障がいのある児童も継続して参加する中で得意な作業を見つけ、家でのお手伝いや家庭での過ごし方につながっている。また、兄弟児が楽しみに参加している組が多くあり、兄弟児支援にもつながっている。　述べ参加者数　約200人

## （５）3年後のありたい姿【公開】

※本基金による3年継続助成終了時の2018年3月末、どんな組織や事業になっていることを目指しますか?

発達障がい児は、場所見知りや人見知りなどこだわりの強さ、多動、コミュニケーション障害などの特性がある。幼少期から定型発達の子どもとはうまく遊べないことが多く、また行動範囲も狭くなりがちであるため孤立しやすい。まずは、発達障がい児とその家族が、地域で安心して過ごせるコミュニティが確立されるべきである。ただ、子どもの支援にあたる専門機関においては、「子どもの支援」に重点をあてるため、「両親の支援」まで手が回らないといった意識も根強くある。これは、専門分野に限らず、一般的な子育てに対する考え方においても、両親に寄り添うこと自体を否定的にとらえる人はとても多い。

当団体が行ってきた家族支援事業においては、初めて参加申し込みをした母親から「勇気を出して来てよかった！」との言葉も聞かれるなど、新たな場所に参加するまでには、時間がかかることが伺えた。また、「迷惑かけてごめんなさいといった言葉は、イベント終了後にはあえて言わずに、楽しい思い出を家庭に持って帰ってくださいね」と言葉をかけると、母親が安心し涙を流す場面も多くみられた。両親や家族の抑うつ軽減とソーシャルサポート体制作りを目的とした交流の場が、発達障がい児療育の現場に並行して設置されることが望まれる。そして、この事業を行うことでみえるであろう、両親と家族に向けた精神的ケアとソーシャルサポート支援が、より良い子どもの育ちに繋がっていくことを発信し、子育ての環境を整える支援の重要性を啓発できる場となることが望まれる。

よって、当団体としては、発達障がい児の家族の交流の場(サロン)を創設する。継続するうえでは、財源を確保し、運営することが最重要である。申請事業を継続していく財政的な基盤と連携の基盤を構築するために、当団体に相談支援事業所を開所し、相談支援事業所の事業の一環として継続していく。地域の障害児支援事業所だけではなく、行政や保健センター、療育施設、武豊町子育て協働ネットワーク、放課後デイ事業所連絡会と連携していく。その事業を行うことにより、地域において発達障がいに関する相談窓口の一つとなっていければと思う。

# ２．申請事業について

## （１）深掘りしたい地域や社会の課題【公開】

※申請事業で深掘りしたいのは、どんな課題ですか？　その課題は現在どんな状況か、緊急性や重要性、深刻さなどを説明してください。

・　知多南部(武豊・美浜・南知多)での、発達障がい児の親が抱える不安はどういったものであるか。

* 知多南部(武豊・美浜・南知多)の障害児支援事業所スタッフと、発達障がい児の家族が、発達障がい児の親・家族対象の精神的ケアとソーシャルサポートを目的とした交流の場をどのぐらい必要としているか。

日本発達障害福祉連盟の調査(2008)でも、発達障がい児を持つ親にはうつ病あるいはうつ状態が多く、同連盟は親がうつ状態になると子どもにとっても不適切な養育状況になりやすいことを指摘している。「発達障がい児をもつ母親の抑うつに関連する要因の研究(道原・岩元(2012))では、母親が就労していない場合、尚且つ専門機関からの「子どもに関する情報提供」や「日常の対応方法に関する情報提供」のサポートが少ない母親は、そうでない母親よりも抑うつ傾向が高いということを報告している。発達障がい児の療育の必要性が重要視されるのであれば、それと同じぐらいその家族を支えていく体制作りが、現代の社会には必要不可欠なものなのである。現に、平成２６年７月、厚生労働省「障害児支援の在り方検討会」において、「家族支援の充実」が記載されている。その内容は２点に分けられ、「保護者の子どもの育ちを支える力の向上」としては、発達障がい児について育てにくさと対応方法を学ぶペアレントトレーニングの実施が検討されている。もう一つは、「精神面でのケア・カウンセリング等の支援の充実」として、家族が子どもの障がいについて前向きにとらえられるように、家族がストレスや悩みを抱えている場合は、特に精神面でのケア・カウンセリングを充実させ、専門機関へつなげることが必要であると記載された。

北部の地域は名古屋市に隣接しており、療育についての情報は得られやすいが、知多南部（武豊・美浜・南知多）の郊外では、専門機関もここ2年で開設されるなど、地域住民の療育に対する認識も低い。よって、上記2点を中心に調査する必要がある。

## （２）深掘りしたい課題を象徴する写真（1枚以上を貼り付け、説明してください）【公開】



当団体事務局長と二人の子どもの写真である。この写真を撮ったのは約5年前。現在は、特別支援学校小学部に通う発達障がいを持つ長男と、保育園年長の次男。次男の1歳の誕生日に撮ったものである。この時の長男は多動で、一緒に歩くことは困難であった。夫婦とも県外出身であり、祖父母もいない状況での子育てで手が回らず、次男をおんぶして、長男をベビーカーに乗せての移動でないとどこにも行けない時期であった。また、長男は言葉が遅かったことで、定型発達の子どもとの発達の差から、子育てサークルや支援センターに行くことも母親自身がつらくなり、誰にも相談できずに孤立していた時期であった。この日から約半年後に療育施設に通園を開始したが、その半年間が最も孤独な時期であった。先行きの不安と、自分を責め続ける毎日から心から笑うこともできなかったため、母親の笑顔が引きつっている。このころの写真はこの一枚のみである。この時期に安心して相談できる場所があったなら・・という想いが、当団体の家族支援活動の原点となっている。

## （３）課題を共有して巻き込みたい対象者（3つまで）【公開】

※課題を共有し、巻き込みたい対象者はどんな人ですか？　例えば、最終（公開プレゼンテーション）選考に参加してもらいたいのはどんな人ですか？（各対象者の優先順位もつけてください）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 顧客の属性  （年代、性別、人数等） | 巻き込みたい理由 | 優先順位 |
| 知多南部（武豊・美浜・南知多）の発達障がい児にかかわっている支援者  (年代は問わず、特に学齢期の放課後等デイサービスにかかわるスタッフ・相談支援員)　６名  ※内訳・・3町には、放課後等デイサービスは当団体含め5団体。各団体1名と、知多南部相談支援センターの相談員1名。 | 発達障がいの子どもを育てる親の気持ちに寄り添うということは、どこの現場でも難しい課題となっている。もちろん事業所は子どもの支援が中心であり、家族の支援までは行えないのが現状であるため、多くの事業所が連携して課題を共有して一緒に考えていく必要があると考える。 | １ |
| 知多南部(武豊・美浜・南知多)の発達障がい児の子どもを持つ両親  ５０名 | 子育て中の両親は、子どもの障害があるないにかかわらず、「大変だから助けて」ということが言いにくいことが多くある。「自分が大変」であるということ自体にも気づけていない親も多い。自分自身を振り返り、周りにうまく頼って、親子が笑顔で過ごせる日々を増やすきっかけとなってほしい。  また、障がいを持つ子どもの親として、経験してきたことが、若い世代の母親の相談に乗るという経験につなげるきっかけとなり、この事業に協力をお願いできる家族を育てていきたい。 | ２ |
| 知多南部(武豊・美浜・南知多)の一般の地域住民　１０名 | 療育がいくらうまく進んでも、地域とのつながりがなければ、子どもの将来の安定は望めない。地域の方に発達障がいを抱える子とその家族の現状を知っていただければと思う。 | ３ |

## （４）解決策の先行事例（3つまで）【公開】

※深掘りしたい課題の解決策には、どんな先行事例がありますか？

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 先行事例（組織名や事業名、地域等） | 先行事例だと思う理由 |
| 1 | 大府市　国のモデル事業を活用したペアレントトレーニング(平成１９年から) | 行政が主催しており、ソーシャルサポートに繋がりやすく、その後のフォロー体制が確立されている。 |

## （５）申請事業（課題＆先行事例の可視化）で想定する計画と目標

※申請事業実施期間：2015年4月1日〜2015年6月30日のうちで任意

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 4月 | 5月 | 6月 |
| 全体の  予定 | ●5日（日）：集合研修 |  |  |
| 事業内容 | （１）対象者の設定  （２）実態調査内容の設定(聞き取り・アンケート調査)   * アンケート配布先(案)   ・知多南部の療育施設(児童発達支援事業所)支援者・家族  ・放課後等デイサービス  ・保健センター  ・子育て支援センター  ・各町の当事者団体 | （１）アンケート配布先の決定と聞き取り調査の対象を検討・決定　配布  （２）アンケート配布先の障害児支援関連機関への本調査説明  （３）聞き取り調査対象者の本調査説明　聞き取り | （１）調査結果収集  （２）調査結果集計 |
| 目標 | 実態調査準備 | 実態調査実施 | 調査結果集計 |

## （６）申請事業（課題＆先行事例の可視化）で想定する実施体制（役割分担や協力先なども記入）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 担当者氏名  会社名、外部団体名 | 団体との関係 | 役割・担当業務  （できるだけ詳細に） |
| １ | モグラー等のボランティアスタッフ（4名程度） | ボランティアスタッフ | 地域の障害福祉関連社会資源の調査  調査地域の状況調査  アンケート作成・準備 |
| ２ | 地域問題研究所  スタッフ | アドバイザー | 調査内容作成・集計  行政への説明 |
| ３ | 知多南部放課後デイ連絡協議会 | 関係団体 | サロンの実施における広報  ボランティア募集の告知 |
| ４ | 武豊町子育て支援協働ネットワーク | 関係団体 | 子育て支援の現場における広報  託児スタッフの紹介　サロンイベント講師派遣 |
| ５ | Paka Paka事務局スタッフ | 当団体スタッフ | 必要に応じ、臨床心理士によるカウンセリングや療育学習会、企画の補助。 |

## （７）課題の可視化による社会的インパクト【公開】

※課題を可視化することで、地域や社会にどんな影響を与えますか？

知多南部(武豊・美浜・南知多)でどのぐらい発達障がい児を抱える家族支援が必要だという意識がどの程度あるのかが明確になる。このことは、各地域での発達障がい児支援体制の在り方に影響を及ぼすと考える。

　例えば、障害児支援事業所は「子どもを見る場所」であり、「親の支援をする場ではない」と考える支援者意識や固定観念はなかなか変わっていきにくいが、国がこれから家族支援を充実させるという方針を示している中、この重要性を支援者が考えていくきっかけとなるのではないか。発達障がい児支援に関わる支援者の家族支援に対する意識が向上することにより、発達障がい児を抱える家族の相談場所が増え、情報もいきわたりやすくなる。また、地域からの孤立を防ぐことにつながり、療育環境の質の向上につながっていくと考える。

## （８）申請事業（課題＆先行事例の可視化）終了後に想定する解決策【公開】

※申請事業終了後、可視化された課題をどう解決していくことを想定していますか？

　発達障がい児の療育環境が地域でまだ根付いていない地域を含む、知多南部3町(武豊・美浜・南知多)を対象に、発達障がい児の家族対象の交流サロンを開設する。発達障がい児の家族は、「困っていること」を具体的に発信できないことが多い。家族がどういった居場所を求めているのか、どういう場所であれば参加しやすいのか、子どもの障がい程度によりどのぐらい参加に向けた意識の差があるかなど、調査結果をもとにニーズの問題解決に向けた交流サロンの開設を目指していく。例えば、武豊町子育て協働ネットワークを通し、託児スタッフを紹介において地域の子育て支援団体と協力する、リフレッシュ企画であれば、様々な分野の講師を派遣してもらうなど、社会資源を多く活用し、地域に密着した実践を行う。サロンのサポートについては、放課後デイ連絡協議会を通し、発達障がい児の両親で協力して頂ける方を募集し、同じ当事者として企画に参加していただき、サロン内での親のサポートに当たって頂く。それにより、事業所スタッフでは引き出しきれないニーズを引き出せるサロンを目指していく。

## （９）申請事業（課題＆先行事例の可視化）の収支予算

※「収入合計」と「支出合計」は金額を同じにしてください。

【収入】

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 内訳 | 金額（円） |
| 1）本助成金 |  | 10万 |
| 2）その他収入 |  |  |
|  | 収入合計 | 10万 |

【支出】

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 費目 | 内訳および積算根拠（単価、個数など） | 金額（円） | |
| 本助成金 | その他収入 |
| 人件費  事務用品費  会場費  交通費  雑費 | 一日800円×6.5時間×10日  コピー代　(一枚30円×10枚×50人分)  文房具購入費　ボールペン100円×５  ファイル　(100円×10)  半日2500円×10日  ガソリン代　(1㌔30円×４０キロ×４日) | 52000  15000  500  1000  25000  4800  1700 |  |
|  | 支出合計 | 10万 |  |